

1 算式1って何だろう？

中学校間の内申(評定)格差を調整しようとして設けられた数式。内申合計の平均値が95より高い中学は内申が下げられ、95より低い中学は上げられる

$$\text{算式1} = \text{自分の内申} + (95 - \text{自分が通う中学校の内申合計の平均値})$$

中1～中3の内申合計で、満点は9教科×5段階×3年分=135点満点になるよ！

県が決めた95を基準にして、自分の通う中学が高い分は引かれ、低い分は足される式になっているよ！
各中学校の内申合計の平均値は「m値」と呼ばれていて、中学によって85～105ぐらいの幅があるんだ！

 調整前は同じ内申でも、中学校が違うと内申に大きな差が出ることがある。

【例】

隆君の内申（9教科オール3 → $9 \times 3 \times 3 = 81$ ） 隆君の通う中学の内申合計の平均値(106)

$$\text{算式1で計算した隆君の内申は} \dots\dots\dots 81 + \frac{95 - 106}{-11} = 70 \Rightarrow -11 \text{点}$$

内申の平均値が「95」より11点高い中学のため、隆君の内申は11点下げられます。

恵さんの内申（9教科オール3 → $9 \times 3 \times 3 = 81$ ） 恵さんの通う中学の内申合計の平均値(83)

$$\text{算式1で計算した恵さんの内申は} \dots\dots\dots 81 + \frac{95 - 83}{+12} = 93 \Rightarrow +12 \text{点}$$

内申の平均値が「95」より12点低い中学のため、恵さんの内申は12点上げられます。

算式1により内申が不当に下げられてしまうことも…

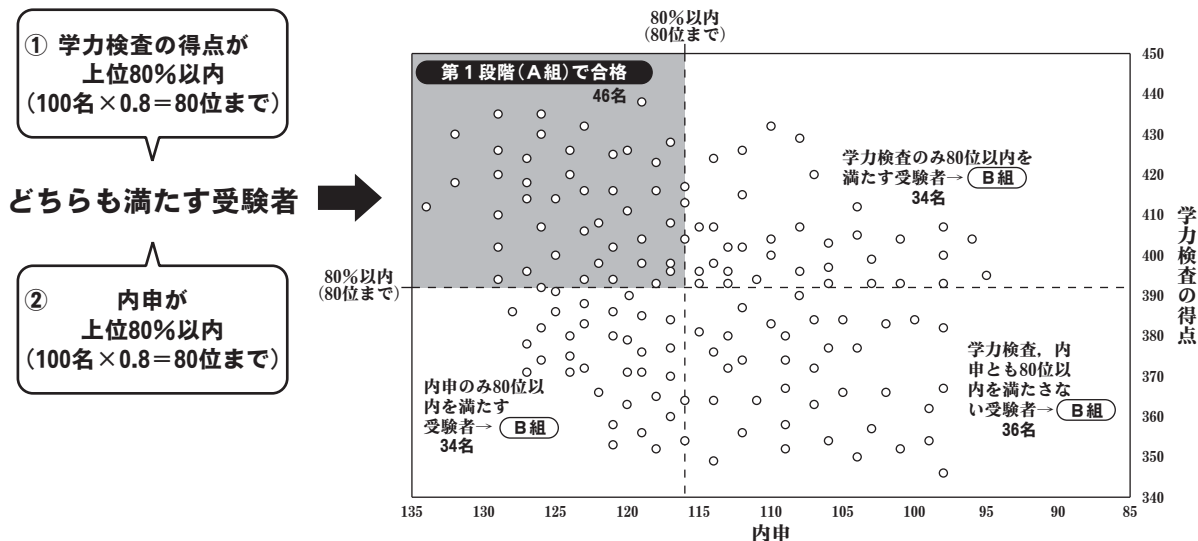
算式1をもとに内申が調整されますが、絶対評価になって中学校間格差が実際には出ることになる内申に対して「各中学校の内申を強制的に県の標準値に合わせる」という調整には無理があり、受験生が非常な不利をこうむるケースが出ています。内申合計の平均値が高くなる中学校には、実際に生徒の学力が高い中学もあれば、先生の内申のつけ方が甘い中学もあります。学力が高いA中学、内申が甘いB中学について考えてみましょう。A中学もB中学も中学校内申合計の平均値を100とすると、県の標準値95を超えているので、内申が5下げられます。B中学の甘い内申は調整され

たと考えられますが、実際に学力が高いA中学の生徒は不当に内申が下げられたことになります。また、特に学力が高く、どこの中学にいても最高の内申(135点)をとれる生徒が、B中学に在籍した場合も不利をこうむることになります。実際の客観的な学力が135点であっても、内申が甘いB中学に在籍していたために内申が下げられてしまうからです。算式1は内申を調整するために導入されました。しかし、数式による安易な調整であるため、実際には学力が高い生徒の内申が不当に下げられ、本来なら合格するはずの生徒が不合格になるという大きな問題があります。

2 第1段階(A組)では定員の何%ぐらいが合格するのだろうか？

第1段階では後期選抜の定員の40～60%ぐらいが合格

【例】下のグラフは、後期選抜の受験者150名で、定員が100名の場合の分布です。



上のグラフで、学力検査の得点と内申のそれぞれ上位80位まででラインを引いたとき、学力検査の得点と内申のどちらも80位以内でなければ合格にならないため、合格者は最大値の $100 \text{名} \times 0.8 = 80 \text{名}$ ではなく、定員の80%より少い $46 \text{名} \div 100 \text{名} \times 100 =$

46%となっています。ただし、受験者の分布のしかたや倍率によってこの割合は変わってきます。一般的には後期選抜の定員の40～60%ぐらいが第1段階(A組)で合格となっています。

3 K値って何だろう？

後期選抜のB組合格者を決める「算式2」で内申の重みを調整する値。1以上の整数で内申にかける。K値が大きいほど内申の比重が重くなる

算式2 = 学力検査の得点 + K値 × 内申

値が大きいほど内申の比重が大きくなる。多くの高校が「1」を採用

学力検査の得点と内申の重みは次のようになるよ！

	<学力検査>	:	<内申>
K = 1 …	500	:	135 (135 × 1)
K = 2 …	500	:	270 (135 × 2)
K = 3 …	500	:	405 (135 × 3)